

ジャズと、ジャズをめぐる人たちの出会いを求めての旅は、その後も幾度かチャンスがあったけれど、六四年夏の終わりから秋にかけての初めての世界一周が、最も盛り多かつたような気がしている。だから古いお話で恐縮だが少し続けさせてほしい。

ニューヨークから六時間(「アポロ」)。

### △(19)▽



半、パリに着いたのは九月十三日の早朝だった。当時は日本人の姿を目にするのは珍しく、何かほっとした気分でお互いに声をかけ合ったが、オurlリー空港で知り合った紫野氏夫妻(製薬会社ファイサーの現社長)や三十歳ぐらいに見えたドクター旗福(後に医学部教授になられた)といっ

た方たちは、幸いジャズにも興味を示して下さったので、夜のジャズクラブ探訪にお付き合い願ったものだ。

### パリのクラブ探訪

さて、パリで名の通るのは、ラテン区の「ル・シヤキペシユ」とシヤンゼリゼ裏通りの「ブルーノート」(後の「アポロ」)。

まず「シヤキペシユ」は学生街に近く、一階は日本でおなじみのレコード主体のジャズ喫茶、この種の店は外国では珍しい。ながしかを木戸番とおぼしきおぼろさんに払って地下に下りると、そこは洞穴みいたなジャズクラブである。その夜聴いたのは、フランス人のピアノトリオをバックにした少年の面影を残す黒人トランペッターだった。

そのプレーのあまりのすごさにステージを終えた彼に思わず声をかけてしまったが、それが全くの無名だったウディ・シヨウであった。二年

「ミンガスグループに同行してヨーロッパに渡ったドルフイーを追ってこちらに来たんだが、六月ベルリンで急死した彼にどうとう会えなかつた。今はニューヨークに帰る

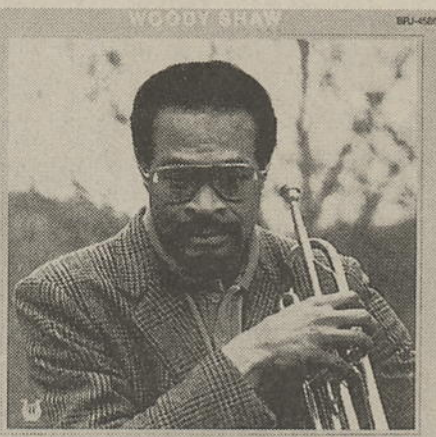
## ショウのペットの すごさに思わず声

お金をかせぐために、(ここで吹いているんだ)。

### 悲惨にも片腕切断

願いかんって帰米したシヨウは、その年の暮れ、ホレス・シルバー・クインテットに

抜てきされて二躍スターダムにのし上がり、その後も成熟を重ねて近年は、マイルス・デヒス自身から、「マイルス切られ「バップエイチ」のテを追う最も近い男」と絶賛された人気絶頂を伝えられたばかりなのに、ついこの間の八月九年二月、地下鉄で悲惨にも



4月に発売されたウディ・シヨウのCD「セッティング・スタンダーズ」

片腕切断という致命的な事故にあつてしまふ。

そして四月の救援金募集のコンサートには、アメリカを代表する有名プレーヤーが、こぞって参加してシヨウの存在の大きさを今更のように教えたが、その願いもむなしく五月十日、四十四歳の若さで

「シヤンたちがのどをつるおす場所でもあつたから、すぐ友達になれたのだ。

それがミンガスグループ出身のトランペッター、テッド・カーソンや、ヨーロッパ随一のハウスピアノスト、シヨルジュ・アルバナで、後に「フットユラ」レーベルから日本に紹介されたとき、またもやライナーを担当する縁が生まれたのも、こういう交わりがあつたればこそではない。

### すてきなコーラス

だが何といつても忘れられないのは、たまたまその期間「ブルーノート」に出たコーラス「ダブル・シックス・オブ・パリ」だ。「マンハッタン・トランスファー」にまで強い影響を与えたこのコーラスは、フランス人でありながら、むつかしい「バップ」のウオーカリーズ(器楽曲に詩をつけて歌う)に挑戦して成功したすてきなグループだった。「ヒバップ」に今も執着する僕にとっては、本当に幸運な出会いだったんだねえ。